

東海能楽研究会 年報

能から舞踊へ―吾妻能狂言をめぐって―

安田 徳子

明治になると、幕藩の保護を失った能狂言は衰亡の危機に陥った。そこで、庶民化、大衆化を図って、危機を切り抜けようとした試みが「吾妻能狂言」であった。河合佐季子氏は、現存する「吾妻能狂言」の資料として、上演能組(番組)二二枚、「吾妻能狂言」台本七種を紹介している⁽¹⁾。これらの資料から、松本亀松、古川久、小林貴、河合佐季子ら⁽²⁾によって分析されたところによると、「吾妻能狂言」は明治三年頃から一四年頃まで行われ、消滅したと思われる。

宝生流シテ方日吉吉左衛門が中心となつて、囃子方に三味線・箏による音楽を取り込み、能狂言を庶民・大衆向けに作り替えて、東両国中村楼(中村屋)及び両国柳橋河内屋で披露し、その後は浅草天王橋際福富町の日吉吉左衛門自宅で、繰り返し上演した。興行は、ほぼ能興行に倣つて、翁三番叟で始まり、数番の能仕立、狂言仕立の演目が上演された。但し、能や狂言

曲ではなく、「浅妻船」のように、長唄種のものも有った。『隅田川乗合船』『吾妻風流』の台本は、今も伝わっているが、能「隅田川」とは大きく異なるし、『吾妻風流』も大意即妙な詞章があり、浄瑠璃や長唄の担当部分もある。『女鉢木』『靱猿』などは台詞の抜書で、歌舞伎などのように役割部分だけを役者には渡したのであろう。一役分の抜書では全体像はよくわからないが、本来の能や狂言よりかなり書き替えられていたようである。興行は一日だけのこともあれば一〇日以上に亘って日替わりの演目で続けられることもあった。立方は能役者・狂言役者が勤めた。西村隼太郎編『諸芸人名録』(明八・一〇刊)の「吾妻能狂言師」の項には、シテ方・ワキ方として日吉吉左衛門・福王繁十郎・桐谷銭次郎・野村俊太郎・日向吉次郎・長命新之助・清甚作の七名、狂言方として岡村獅々尾・岡田七右衛門・中村新三郎・名女川庄三郎・矢田源八郎・名女川市太郎・高橋銀八郎の七名が挙げられている。狂言方は全て驚流の狂言師。囃子方は、最も多いのは長唄で、唄方坂田仙八・岡安喜代蔵・吉住小三郎と三味線方

の杵屋勝三郎・杵屋小三郎らである。他に一中の菅野派と宇治派・常磐津・富本・清元の連中、箏曲山田流の中能島派と山登派、歌舞伎囃子方の住田又兵衛・中村寿鶴・藤舎芦船とその連中で、江戸系の近世邦楽が参加している。「吾妻能狂言」という呼称はここに由来するのであろう。関岡吉太郎氏によると、舞台奥に山台風のものを作り、「地謡」と「囃子方」に替わつて、所謂地方がこの上で演奏した⁽³⁾という。

結局、「吾妻能狂言」の試みは一〇年ほどで終わったが、これによって、邦楽や舞踊の側に能狂言の影響が染み込み、能がかりの新しい舞踊曲を生み出した。

ところで、名古屋若宮末広座で、明治六年七月と一二月に「吾妻能」と称した興行の記録が残っている。まず、七月興行は、『棄拾雑集』(市)の(2)に「能組」の写が載り⁽⁴⁾、小寺玉晃編『勾欄類雑集録』・『扶桑新聞』『近代歌舞伎年表名古屋一』にも言及がある。これらによると、この興行は明治六年七月二二日より二五日まで行われ、『棄拾雑集』によると、「元御役者西村大蔵を初狂言方四拍子共友人交

女芸者踊り師匠共稽古致シ常磐津豊後義太夫浄瑠璃を交へ照二葉能取組尾国連中二而興行」とあって、『翁』『高砂』『田村』『羽衣』『小鍛冶』『紅葉狩』、祝言「靱猿」の演目が記され、配役は何れも西川鯉三郎の門弟の女流踊り手の名、下段に能囃子方の小鼓・大鼓・太鼓・地謡の名と長唄・三味線・岸澤(常磐津)太夫三味線・浄瑠璃(義太夫)太夫三味線の名が記されている。一月興行は、『勾欄類雑集録』一三日から二九日とあり、「吾妻能組」(御園座蔵、『近代歌舞伎年表名古屋一』に翻刻)によると、『翁』『鶴亀』『桜川』『土蜘蛛』『望月』『船弁慶』、祝言「三人唐人」「住吉音頭」の演目で配役は七月興行とほぼ同じ、囃子方は記されず、祝言部分に「岸澤」とある。この二つの興行は、東京の「吾妻能狂言」の活動の最盛期と重なり、「吾妻能」と称しているが、こちらは西川鯉三郎の女性門弟による舞踊興行である。能狂言の演目を長唄や義太夫・常磐津曲に書き替えて、鯉三郎が振付たものだったと思われる。

七月興行は『棄拾雑集』『勾欄類雑集録』には「照葉能」ともあり、『勾欄類雑集録』によ

ると、「若宮芝居表に西川鯉三郎口上書として、何かな珍敷筋取組申度御当地御方々御寄合ニ而今度吾妻御てり葉興行」とあったというから、東京の評判の「吾妻能」を当地で馴染みの「照葉能」すなわち女能で見せるといふ口上だったのではなからうか。名古屋では、女能（上方下りの女流舞踊）や仙助能、照葉能といった男女混合で三味線入りの能の興行がしばしば行われていた。例えば、文化三年（一八〇六）一〇月一八日より清寿院境内で、京祇園の芸子（京舞井上流の舞女）による女能が「女舞曲」と称して興行され、これを観た猿猴庵高力種信がその日記に「是は女能にて、伊勢にて初て興行し、京にても流行し、当地にては女能は上不相済、女舞曲と看板に出し、間へ女舞等を入たり」と記し、『女謡曲採要集』なる絵入り本に著している⁽⁵⁾。こうした土壌の下で、鯉三郎は東京の「吾妻能狂言」の評判を聞き、能狂言師（男）を舞女に置き換えて、地謡・囃子方に地歌ではなく、江戸邦楽の長唄と常磐津・義太夫を加えて、女流の「吾妻能」を見せたのである。この時の上演曲は、そのまま名古屋西川流の舞踊曲となった。

注1 河合佐季子『吾妻能狂言の研究―その芸態と後世への影

響―』（東京芸術大学博音213、二〇一二・三）。但し、掲出の台本七種中には明治以前のものもあるので、「吾妻能狂言」台本とは断定できないものが含まれているか。

注2 松本亀松『能から歌舞伎へ』（昭和一六・四、謡曲界発行所）、古川久『明治能楽史序説』（一九六九、わんや書店）、小林貢『鶯流滅亡の一因―鶯流は歌舞伎と接近したことによって滅びたのか―』（『能楽思潮』一九、一九六二）及び注1、他。

注3 関岡吉太郎『吾妻能狂言』装束屋が楽屋から『第四話』（『宝生』昭和六年四月）

注4 この興行については、倉田喜弘『明治の能楽』（平成九年三月）、飯塚恵理人『近世能楽史の研究』（平成一一・二、雄山閣出版）にも言及がある。

注5 『女謡曲採要集』は前掲『近世能楽史の研究』に詳細な紹介がある。岡田万里子『京舞井上流の誕生』（二〇一三・三、思文閣出版）には、『女謡曲採要集』への言及と共に、井上流では能がかり曲が多くあり、「女能」と称して花街や名古屋でも興行されたことが述べられている。

能『由良物狂』の舞アト

三苦 佳子

世阿弥の物狂能の場面構成について、筆者はこれまで『桜川』^(注1)と、『水無月被』^(注2)『柏崎』^(注3)『班女』^(注4)『花筐』^(注5)『百万』^(注6)の六曲の女物狂能と、『土車』^(注7)『丹後物狂』^(注8)『木賊』^(注9)の男物狂能に『芦刈』^(注10)を加えて考察し^(注11)、世阿弥独自の手法を確認してきた。

今回は、「物狂」という言葉を題名に持つが、作者は判明してない『由良物狂』について検討したい。『由良物狂』は、曲舞（亂曲）の謡は今日に伝わるが、能としては演じられていない。この能を論じたものに田中允氏による『各曲解題』^(注12)がある。

世阿弥の伝書『五音』（下）に「由良湊節曲舞 同曲付ふしつけ 幽曲（凡、節曲舞ノ幽曲ノ懸は初也 亡父作書）」^(注13)とあるから、観阿弥の作詞作曲による「由良湊」という曲舞がすであつた。『申楽談儀』には、その一節の「とく」と誘はれて、身を浮草の根を絶えて「松には風の音羽山」などが引かれ、曲舞の謡い方が話題にされている。「由良の湊の曲舞、山姥、百万是らはみな名譽の曲舞共也」と曲舞が存在したことが認められるものの、能『由良物狂』は取り上げられていない。

能『由良物狂』には、観阿弥の作

とされる曲舞『由良湊』が（ケリ）本文が変更された形で取り入れられている。田中允氏は「曲舞の所が観阿弥らしい名文であるのに対し、その前後はあつけない見劣りのする嗣章である点にも、完曲が観阿弥作とは考へ難い」^(注14)と判断されている。

観阿弥の曲舞があり、それをを用いて能を脚色する可能性の強い人物がいるとしたら、それは世阿弥ではないか。仮にこのように想定しよう。

世阿弥の物狂能は、『高砂』のような脇能の序破急五段構成に改良を加えた五段構成となつていて^(注15)、その特徴は次の三点であつた^(注16)。

〈X〉発端。一段目の前に、物狂いになつた経緯を描く場面を作る。

〈Y〉【二声】で登場したシテが、【一セイ】でなく【サシa】を謡い【カケリ】を舞つて【サシb】となる。

〈Z〉山場。三段目の【問答】後の【初同】か、四段目の曲舞の後の「舞アト」に、一曲の中で最も盛り上がる場面が作られている。

『由良物狂』では、別れた愛妾花菊を尋ね歩く紀伊由良湊の信夫兼祐が、遠江掛川の宿で物狂いとなつた花菊と再会することになる。まず発端の〈X〉はない。〈Y〉も【サシa】ではなく、『高砂』などと同様（【一セイ】）を謡うが、次に【カケリ】の

場面を加えてから〔サシ〕に続く。
〔Z〕の山場については、三段目の
〔初同〕の場面がそもそも存在せず、
そのまま四段目の曲舞の場面となる。
ところが、山場の場面が補筆され
ている写本が存在するのである。

『由良物狂』の本文について、法
政大学能楽研究所での閲覧により、
〔キリ〕が「長き契りとなりにけり」
で終わる本文に、「福王系番外本（観
世流五百番謡本）」「田安家旧蔵下掛
番外謡本七十冊」「下村万印二十冊
之内」を確認した。これとは別に〔キ
リ〕が「夫婦の道ぞたのもしき」で
終わる「樋口本番外曲八十冊」「未
刊謡曲集」（三）があり、田中允氏
はこちらの方を古作とするが、両者
で明確に本文が違うのは二箇所所
であった。

「下村万印二十冊之内」の末尾に
次の追加本文が補記されていた。

シテ〔詞〕「哀や実其古へ
有人に宮仕へ申し時
酒宴の折柄扇子追取舞し事を
今又思ひ出られて
上へむかしをこふる 舞の袖
同へ返々も 恨めしや
〔舞〕
シテ〔ワカ〕上へ去にても
いつか恋しき 我妻よ
上同へ逢事まれ成 うとんけの
逢事まれ成 うとんけの

花待えたる 心みたれ
人目も恥す 暫しが程は
舞かなで 所は遠江
神に祈誓を かけ川の宿に
シテ下へうき年月を送りつつ
下同へ うき年月を送りつつ
かく浅ましき身なれ共
せめてうき人に
今一度逢せ給へと
臥沈みてぞ 泣居たる

この内容は、〔クセ〕後の〔舞〕と
それに続く「舞アト」の場面に相当す
るもので、「逢うことまれ成」から〔大
ノリ地〕になると思われる。ただし、
その挿入箇所は夫婦が再会する場面
《五》段目の〔ロンギ〕の途中に指定
されていた。この※追加本文を、〔ク
セ〕の次に移動させると全体の場面
構成が世阿弥の物狂能に近づく。

《一》
【次第】〔次第〕〔詞・名ノリ〕
〔上歌・道行〕〔着きセリフ〕
《二》
【一声】〔一セイ〕
【カケリ】〔サシ〕〔下歌〕〔上歌〕
《三》
【問答】
《四》
〔サシ〕〔次第〕
〔クリ〕〔サシ〕〔クセ〕
※〔詞〕〔舞〕〔ワカ〕〔大ノリ地〕

《五》 〔ロンギ〕〔キリ〕

※印の追加本文の最後で、シテの
女が「心乱れ」「人目も恥じず」「舞
かなでる」場面で感情が高ぶってい
き、最後に「今一度逢せ給へと臥沈
みてぞ泣居たる」で、我を忘れて泣
きくずれる。この発想は世阿弥が物
狂能の「舞アト」に作る山場と同じ
形となることから、世阿弥が関わっ
た作品である可能性を考えたい。

『由良物狂』は、世阿弥が、観阿
弥の曲舞を取り入れて能に仕立て
た。ただし、『桜川』のように物狂
能の手法が整っていないのは、世阿
弥の初期の作品だったからであり、
物狂能も最初の頃は通常の序破急五
段構成に近い形であった。文章とし
てもあまり巧妙ではないという印象
を受けるのは、世阿弥が若い頃に書
いた作品だからではないか。このよ
うに推測した場合、物狂能を面白く
しようとして「カケリ」と「舞アト」
の場面を編み出していった世阿弥の
工夫の足跡が『由良物狂』から見え
てくるように思われる。

注1 「世阿弥の女物狂能『桜川』
の場面構成―『高砂』との比較か
ら―」『名古屋芸能文化』二十八
号、二〇一八年十二月
注2 「世阿弥の女物狂能の場面構

成』愛知産業大学短期大学紀要』
三十一号、二〇一九年三月

注3 「世阿弥の男物狂能の場面構
成」『名古屋芸能文化』第二十九号、
二〇一九年十二月

注4 『未刊謡曲集』（三）

注5 『世阿弥・禅竹』より引用

熱田猿楽大岡宮福太夫と松岡 市郎太夫について

飯塚 恵理人

江戸時代の熱田神宮で正月に行わ
れる踏歌祭の翁太夫を勤めていた大
岡宮福太夫が、和歌での勧進活動
をし、津島神社の社家や地元素封家
がそれに応じたことを示す資料を前
稿^{注1}で紹介した。それには「他の
の作者も津島神島連の俳人達や津島
神社と何らかの関わりがある可能性
があるが管見に入らなかった。また
宮福太夫の子孫や菩提寺に関する情
報も現在のところ不明である。資料
や情報を御教示頂ければ、と思う。」
と記したが、今回、それらを補う資
料が見つかったので報告する。

西尾市の岩瀬文庫に『衣浦千鳥
集』と題する和歌集がある。安永三
（一七七四）年発刊で、当文庫には
上下一冊ずつの版本（当該部分は上

巻」と、写本一冊がある。これは当時、津島神社神主であった氷室亮長が取りまとめた交流のあった堀尾春芳（号は弘斎。垂加神道の一派「尾張垂加派」の祖。知多の横須賀村に住んでいた）に贈ったもので、以下の者が和歌を詠んでいる。（版本上巻による）

氷室紀亮長、堀田之邑、服部成康、氷室章長、真野豊綱、大矢部当香、氷室敏則、堀田喜之、堀田記之、堀田之忠、服部康憲、氷室長治、堀田之柯、服部幸康、堀田憲之、堀田敬之、堀田知之

このように前稿で紹介した勸進和歌の詠み手「知之、豊綱、章長、長沼、喜之、記文、幸康、康憲、之忠、憲之、敬之」が、「長沼↓長治」、「記文↓記之」ならばすべて含まれている。また『衣浦千鳥集』は安永三（一七七四）年発刊なので、この勸進和歌が詠まれた年について拙稿で述べた「少なくとも一七六一年から九四年の間の成立と言える。」とも矛盾せず、彼らが太岡宮福太夫の勸進に応じたグループと考えられる。

なお写本には詠み手の名に版本にはない書き添えがあり、現在、それぞれの翻刻を行っている。津島神社神官を中心とする和歌グループの詳細が明らかになると期待している。

また太岡宮福太夫については、熱田神宮の社家の会である朱鳥会が発

刊した『朱鳥雑考』^{〔注2〕}に、（太岡氏）は「宮福大夫といつて、正月二日熱田大宮、八剣宮、そのほか大宮司、祝詞、総検校宅に御謡始めをつとめ、踏歌神事には翁舞をまい、翌日、大福田にて名残の翁を演じた。御遷宮には、祝師とならんで行列の先頭に立った。この家は、猿楽である。伊勢、伊賀上野の祠官であったともいわれている。熱田社家の人ではなかったが、中瀬に住し神宮に奉仕して功太きかったため、社家と同じく、熱田神葬墓地に葬る。今は絶家した。（中略）一 国府宮饒追神事に宮福太夫、

拝殿並びに吉祥天女の神前に翁の舞を舞う。」とあり、残念ながら家は絶え、菩提寺もないことが分かった。

また太岡宮福太夫とともに以前、拙稿^{〔注3〕}で紹介した太鼓（大鼓の可能性もあり）役者の松岡市郎太夫の家についての記述も『朱鳥雑考』に、「一 称宜。中老（中臈）、神官に

次いで祭事に奉仕し、昇殿を許さる。栗田、林、大原、長岡、松岡、磯部、若山、鏡味等。百家。」^{〔注4〕}とあり、また「一 熱田社の中臈として奉仕、

八剣宮、正代官及び摂社高蔵宮と祠官をもつとむもあり。」^{〔注5〕}とあり、

これまで筆者が述べてきたように、享保年間まで松岡家は、尾張藩で「御役者並」という代々能役者を勤めながら、位の高い熱田神宮の祠官としても勤める特殊な家であることが裏

付けられた。

熱田神宮の猿楽であった太岡宮福太夫は、堀田知之のような津島の事業家や氷室亮長のような津島神社の神職を勸進の相手とした。これは謡曲と和歌・俳諧の愛好者層の重なりが大きさを示していると思われる。また知之のような素封家が多く謡曲の愛好者層であったことは、彼らが町衆として関わる名古屋・津島・岐阜・半田などの山車囃子に、能楽から受容したものが多い理由の一つとなっていると考えられる。

注1 拙稿「熱田猿楽太岡宮福太夫の勸進活動」「東海能楽研究会年報第二十三号、東海能楽研究会年

二〇一九年三月発行、十一頁
注2 『朱鳥雑考』熱田神宮朱鳥会編、熱田神宮朱鳥会創立五十周年記念事業実行委員会、二〇〇五年十月発行、一九一頁

注3 拙稿「熱田神宮と能役者―宮福太夫と松岡市郎大夫―」（椋山女学園大学「椋山女学園大学研究論集」第二十九号「人文科学篇」、一九九八年三月発行、一〇九―

一二〇頁、および拙著『近世能楽史の研究』雄山閣出版、一九九九年二月発行収録
注4 注2 八二頁
注5 注2 一七九頁

補記 堀田知之等について御示唆を戴きました金城学院大学教授寺島徹先生、『衣浦千鳥集』の閲覧を御許可戴きました西尾市岩瀬文庫に感謝致します。本稿は平成三十一年度高橋信三記念放送文化振興基金助成による成果の一部となります。

豊橋市魚町 安海熊野神社蔵 一枚のがきから

豊橋・新城 地域間交流の一断面

米田 真理

江戸時代後期から戦前にかけて、豊橋魚町の安海熊野神社では、毎年7月の祭礼を中心に町人の演じる能や狂言が奉納されていた。同様に、新城の富永神社（元牛頭天王社）でも毎年10月の祭礼を中心に能楽が奉納され、両地域の町衆が互いの祭礼能に出演していたことが知られている。「豊橋・魚町の能楽と豊橋の宝生流能楽の歩み稿」によれば、明治から昭和の初めまで「会えばどちらからともなく『案内とは誰ぞ』『ようこそおいでなされた』などの狂言の台詞がとび出すほどなごやかな交流が続いていた。

だが、両地域の交流に際してどのように番組が決められ、出演交渉が

行われていたのかについては、まだ明らかでない。本稿で紹介するのは、こうした疑問に答えてくれる好資料、安海熊野神社蔵の狂言台本に紛れ込んでいた1枚のはがきである。まず、宛名面から見てみよう。

【翻刻 宛名面】豊橋市魚町／藤城良吉殿／御社中御一統／6. 23／「朱印」三河新城本町百華堂／原田嘉門「消印」愛知新城／11. 6. 23／前8―12
*はがきの料額印面部分 日本郵便 壹銭五厘(*印は改行。米田付す)

発信者は新城市本町の原田嘉門。大正の初めごろまでは右市と称し、富永神社祭礼能には明治24年、昭和11年に計38回出演している。はがきが書かれた昭和11年には、狂言演者の長老格であった。

また、受信者である魚町の藤城良吉も狂言をつとめ、台本も計26番を取めた2冊を編集している。富永神社祭礼能には明治44年、昭和23年に計12回出演しており、原田嘉門との共演もあった。

次に、はがきの内容を見てみよう。

【翻刻 通信面】謹啓 御祭能ニ就き御多忙／奉遠察候 只今御はがき／相達拝見仕候 御申越しの菊／市御相手可仕候間左様御了承／願上候 右御社中御一統へ宜布願上候／塗師 番

組へ 換装束卜御記入願上候／道具 鉦子、黒頭、ねり。やせ男面。漆桶。／ヘラは私が調製して持参致し升(*印は改行。米田付す)

内容は大きく分けて、①「菊市」共演の承諾 ②「塗師」の「換装束」についての2点で、昭和11年7月7日と8日に行われた安海熊野神社祭典奉納能に関するものである。①の「菊市」とは狂言「不見不聞」のアド、座頭のこと。原田嘉門は同番組の第一日目にアドとして出演している。このときのシテは木村守彦(豊橋、次アドは矢野幸一郎(豊橋か))で、豊橋と新城の共演だった。

②「塗師」もやはり、同番組の二日目に「替装束」の小書付きで上演されている。出演はシテ原田嘉門、アド加藤甚八(豊橋)、次アド山本光次郎(新城)であった。つまり、このはがきは自分に対する出演交渉への返信なのである。文面から往信が到着次第、折り返し返信したようだから、本番からわずか約2〜3週間前の出演交渉だったことになる。豊橋・新城の共演が定着し気心も知れていたからか、ある意味、余裕なのだろう。

さて、当日の「塗師」は「換装束」、つまり特殊演出での上演だった。『能楽大事典』(小林責ほか、筑摩書房)によれば、後場のシテの装

束は「大蔵流では黒頭・白鉢巻・白練壺折あるいは白水衣、和泉流では角頭巾・小格子着流シ片肌脱ぎ」である。安海熊野神社の狂言台本のうち、No.14―4(鳥居新三郎田蔵)の「塗師」に記された装束付には、「中入後 厚板カ小格子カ着流シ帯前ニテムスフ 腰帶 漆越・ハケ持出ル面ハ登り髭カ鼻引カ 角頭巾」とあり、これは『能楽大事典』で和泉流とされる内容と一致する。つまり、

はがきの「黒頭、ねり。やせ男面」とは、大蔵流と同じ装束を用いるということである。ただし狂言面に關しては、大蔵流で用いられる「塗師」という専用面は豊橋も新城も所持していなかったとみえて、相の似ている能面の「瘦男」を流用したのだろう。ちなみに「ヘラは私が調製して持参致し升」とあることから、他の道具類や装束は豊橋にあるものを用い、身軽に來訪したとみえる。

ところで、なぜ「塗師」は替装束で上演されたのだろうか。さらに、ペテランとはいえ、素人の一存で決められるものなのだろうか。

明治から昭和11年まで豊橋と新城では「塗師」は合計13回上演されており、そのうち5回が替装束で約38%を占める。替装束の初出は明治28年9月14日の富永神社で、出演者は酒井亀太郎・山本孫七・長田安吉だった。それ以前には、明治22年9

月と同24年4月に通常の「塗師」が上演されている。

はがきの発信者である原田嘉門の「塗師」は、大正2年9月8日、安海熊野神社でアドをつとめたのが初出で、同年10月4日には富永神社で替装束のアドをつとめている。シテはいずれも新城の酒井亀太郎で、一ヶ月間に二度、同じ曲をつとめるにあたり、替装束を選択したのである。原田嘉門が初めて「塗師」のシテをつとめたのは大正3年10月4日の富永神社で、替装束での上演だった。この時も同年4月6日に、祭礼能ではないが「新城能楽社中」による「故牧野真三九氏三周年追善能組」が桃牛寺で行われ、通常の「塗師」が上演されている(シテ酒井亀太郎、原田嘉門は次アド)。「塗師」の上演が連続するときは替装束でという傾向が見て取れる。

では、はがきの記された昭和11年はどうだったかという点、6月7日に「新城能楽社中」による追善能が大善寺で行われ、シテ原田嘉門の通常の「塗師」が出ている。やはり、同様の事情だったと考えられる。

このように、原田嘉門の属する新城の狂言グループでは、通常演出にせよ替装束にせよ「塗師」はおはこのごとく自在に演じられていた感があるが、実は、東海地域の「塗師」の上演は非常に珍しい。明治以降の

東海地域の能番組を網羅する『近代名古屋の能楽を支えた人々』の中でも、〈塗師〉の上演は合計19回にすぎない。ところがそのうち13回が、前述のように豊橋と新城での上演なのである。さらに言えば、原田嘉門が出演した昭和11年以降、次の上演は昭和41年11月2日「名古屋和泉会第6回」の〈塗師平六〉（井上祐一・佐藤秀雄・佐藤友彦）まで見られない。

一方で、新城の狂言は明治18年から大正3年まで、狂言共同社の伊勢門水や井上菊次郎、角淵新太郎、勝野重直から断続的に指導を受けており、この間に町の役者が勝手に〈塗師〉を上演し、ましてや替装束を試みたとは考えにくい。つまり、新城を訪れていた狂言共同社の師匠たちは、自分で上演する機会のない演目も承認し、指導していたことが知られる。じつさい、原田嘉門が〈塗師〉替装束のシテをつとめた大正3年の

祭礼能は、伊勢門水がたびたび指導に訪れ、また自身も出演したことから、番組に「先生の手に掛り、殊のほか見事にして能より狂言勝りたり」と付記されている（『新城祭礼能番組帳』）。師匠たちの、地方の町衆に対する大らかな姿勢が窺われる。

こうして豊橋や新城では江戸時代以来、玄人や他の地域とは異なるレパートリーが培われ、脈々と受け継

がれていた。だが、昭和12年に日中戦争が勃発すると、祭礼能は終戦までに、豊橋では12年と16年の2回がかるうじて行われたのみで、新城にいたつては21年まで中断を余儀なくされた。これら戦中戦後の番組に、はがきの発信者である原田嘉門の名前は、すでにない。と同時に、新城の特徴的なレパートリー〈塗師〉も、以後の番組からは消え去ってしまった。1枚のはがきは、両地域の能楽文化の一つの区切りを物語る、証人だといえよう。

【参考文献】

「豊橋・魚町の能楽と豊橋の宝生流能楽の歩み稿」を作る会編『豊橋・魚町の能楽と豊橋の宝生流能楽の歩み稿』、昭和56年／大原紋三郎『新城祭礼能番組帳』、平成8年／同『新城祭礼能番組帳解説』、平成9年／東海能楽研究会（寛鉦一ほか）『近代名古屋の能楽を支えた人々』、平成5年
本稿を成すにあたり、魚町能楽保存会を始め桑名文書研究会のみなさまからご協力を賜りました。なお、本研究はJSPS科研費P17K02431の助成を受けたものです。記して深謝申し上げます。

豊橋市図書館橋良文庫の能楽関係書状

佐藤 和道

豊橋市図書館橋良文庫は、郷土史研究家であった近藤恒次（一九一〇年～一九七八年）の旧蔵資料約三七〇〇冊を収蔵するⁱ。近藤は豊橋市内で教鞭を執る傍ら三河地域を中心とした郷土史の研究に従事、愛知大学総合郷土研究所員、『豊橋市史』編集委員などを務め、一九七二年には『東海道新居関所の研究』で東洋大学から文学博士号を授与されているⁱⁱ。

久曾神昇「豊橋地方における近世以前の能楽」（『愛知大学総合郷土研究所紀要』二〇、一九七五年）は、吉田藩の能楽の実態を数少ない文献資料によって明らかにした唯一の論考である。同稿は近藤が所蔵する植田家伝来の史料に基づいたとされるが、橋良文庫にはこの時久曾神が参照したと思われる植田家文書の謄写本が現存する。加えて同文庫は、同稿が言及していない能楽関係の書状三〇通の謄写本も所蔵する。本稿ではこの能楽関係書状の概要を紹介する。これにより、植田家を中心とする近世の吉田における能楽享受の一端が明らかになることが期待される。なお書状冒頭に示した数字は通

し番号で私に付したものである。

（一）宝生大夫書状

- 1 文化元年二月十六日付
植田七三郎・大山治左衛門・市川吉左衛門宛 宝生弥五郎英・宝生権五郎邦保
- 2 （年不明）二月十三日付
植田七三郎・大山治左衛門・市川吉左衛門宛 宝生権五郎邦保・宝生弥五郎英勝
- 3 （年不明）正月二十八日付
植田七三郎・大山次左衛門・市川吉左衛門宛 宝生弥五郎英勝・宝生権五郎邦保
- 4 （年不明）正月晦日付
植田七三郎・大山次左衛門・市川吉左衛門宛 宝生弥五郎英勝
- 5 文化六年正月廿三日付
植田七三郎・大山次左衛門宛 宝生弥五郎英勝・宝生権五郎邦保
- 6 （年不明）二月七日付
植田七三郎・大山次左衛門宛 宝生弥五郎英勝・宝生権五郎邦保
- 7 （年不明）二月十一日付
大山次左衛門・市川吉左衛門・植田

七三郎宛 宝生弥五郎英勝・宝生九郎友于

8 (年不明) 二月十八日付
植田二六宛 宝生弥五郎友于

9 (年不明) 六月二十九日付
植田二六宛 宝生弥五郎友于

1～8は宝生大夫から魚町町人にあてた年頭の賀状で、文面はいずれも定型的なものである。差出人の宝生弥五郎英勝は十四世将監、権五郎邦保は英勝の娘婿、弥五郎友于是十五世宝生大夫である。また、9は友于の大夫継承に際しての挨拶状であり、継承の時期から文化八年の書状とわかる。吉田藩と宝生大夫との縁は深く、正徳三年三月五日の松平信祝入国祝賀の宴席に九世宝生友春と十世暢榮(丹次郎)が招かれたほか(『御所替日記』)、安永五年五月十七日には十二世宝生九郎友通の一周忌追善の囃子が魚町の町人によって催されている(前掲久曾神稿)。なお宛名に見える植田七三郎は三代目の義方(文化三年没、通称栄作)か四代目の兎堂(文政元年没)であろう。また「植田義方、兎堂、大山次左衛門」は『東海道人物志』に「大鼓(太鼓か)・乱舞・謡」でそれぞれ掲載されている^{註)}。

(二) 川合彦兵衛書状

10 丁酉年正月二十六日付
植田七三郎宛 川合彦兵衛国英

11 (年不明) 二月二十日付
植田七三郎宛 川合彦兵衛国英

12 乙巳六月十六日付
植田栄作宛 川合彦兵衛

13 (年不明) 三月二十六日付
植田栄作宛 川合彦兵衛国英

14 (年不明) 六月十六日付
植田栄作宛 川合彦兵衛国英

15 (年不明) 三月十三日付
植田栄作宛 川合彦兵衛国英

川合彦兵衛は、金春流太鼓役者。天保十四年の金剛座分限帳(片桐登校訂『重修猿楽伝記 文化七年猿楽分限帳』わんや書店、一九八一年所収)に「父 彦兵衛 五人扶持 卯五十五歳」と記載される。いずれも挨拶状で文面も定型的なものが多く、12を除き「年頭御扇子料白銀壹包」を頂戴したことに對する礼が述べられており、植田がパトロンの存在であったことが推測される。なお『東三河文化人事典』(未刊国文資料刊行会、二〇一五年)によれば、

植田家三代目の義方(通称七三郎)は金春惣右衛門に師事したという。仮に義方に宛てたものとすれば、10の丁酉は安永六年、12の乙巳は天明五年ということになる。

(三) 速水猪左衛門書状

16 天明三(癸卯)年正月二日付
植田栄作・平四郎宛 速水猪左衛門義信

17 (年不明) 二月廿七日付
植田栄作宛 速水猪左衛門義信

18 (年不明) 十一月廿九日付
植田栄作宛 速水猪左衛門義信

19 (年不明) 九月廿九日付
植田栄作宛 速水猪左衛門義信

速水猪左衛門は、尾張藩お抱えの金春流太鼓役者。16は年頭の挨拶状。17・19は近況を知らせるものだが、先の宝生大夫、川合彦兵衛書状と異なり、長文で内容も多彩である。文中に「九月廿六日当地発足仕松次郎召連候而大坂表罷登候」(16)、「八月中旬より勢州辺江取越候(中略)彼地も当秋者作方宜候而景氣宣御座候乱舞も相応二時行仕候」(19)とあるほか、17、18には弟子の松次郎や自身の子息を江戸の師家(金春家

か)に派遣したことが見え、活動が広範囲にわたっていたことが窺える。また18では、息男が不慮の死を遂げたことを記し、当てがあれば養子を都合するよう依頼している。「藩士名寄」には、文化五年に速水虎市が父の跡を継いで切米三十石で抱えられたことが見え、18には「私儀茂来年五拾才二相成候」との記述があることから、速水虎市が速水義信の養子に当たる人物であろうか^{iv)}。このほか、「来ル三月高安彦太郎一代能興行相極り申候」(16)、「此度修行申二付国主より茂雑用金儀格別二結構二被申付(中略)私方失費も無之修行為致候事二御座候」(17)など、当時の能楽界の様子を知る上で興味深い記述が散見される。

(四) 小沢三郎兵衛書状

20 (年不明) 十二月十五日付

大山次左衛門・植田七三郎・市川源藏・高橋仁吉宛 小沢三郎兵衛叙庸

21 (年不明) 五月八日付

大山定治郎・市川源兵衛・植田七三郎・高橋仁吉宛 小沢三郎兵衛

22 (年不明) 五月廿三日付

植田七三郎宛 小沢三郎兵衛

23 (年不明) 十二月十八日付

植田七三郎宛 小沢三郎兵衛

24 (年不明) 神無月二日付

植田七三郎宛 小沢三郎兵衛

25 (年不明) 文月九日付

植田七三郎宛 小沢三郎兵衛

26 (年不明) 霜月十七日付

植田七三郎宛 小沢三郎兵衛

27 (年不明) 十二月十三日付

植田七三郎宛 小沢三郎兵衛

28 (年不明) 十一月四日付

植田七三郎宛 小沢三郎兵衛

29 (年不明) 七月廿日付

植田七三郎宛 小沢三郎兵衛

30 (年不明) 五月六日付

植田七三郎宛 小沢三郎兵衛

小沢三郎兵衛は吉田在住の能役者と思われる。久曾神稿によれば、安永年間の番組に小沢六之進の名が見え、文化二年閏八月二十五日に吉田宿本陣で小沢三郎兵衛宗適追善の囃子が行われている。内容は多岐にわたり、石井流・藤田流が江戸の能役者から道成寺の相手を断られたことに関するもの(21)、宝生家が南都への出勤のため吉田を通るはずが取

りやめになったことの通告(26)、小沢が新城の神事能を見物したことに関するもの(29)など、吉田の能に直接関連するものが多い。

本稿では、紙幅の都合と未検討の部分が多いため概要の紹介にとどめた。機を改めて全文の紹介と詳細な考察を行いたい。

i 豊橋市図書館ホームページ「文庫紹介」http://www.library.toyohashi.aichi.jp/?page_id=69

二〇二〇年一月六日閲覧。

ii 豊橋百科辞典編集委員会編『豊橋百科事典』豊橋市、二〇〇六年。

iii 飯塚恵理人『近代能楽史の研究——東海地域を中心に——』(大河書房 二〇〇九年、三九頁)。

iv 飯塚恵理人『近世能楽史の研究——東海地域を中心に——』(雄山閣 一九九九年、四一〇頁)。

映像と音源による善竹彌五郎

藤岡 道子

2018年度末に神戸女子大古典芸能センターにて開催された能楽学会の第31回能楽フォーラムは「初世善竹彌五郎と善竹家の狂言」がテー

マだった。第1部は【報告】で「初世善竹彌五郎と神戸の狂言」(長田あかね)、「善竹彌五郎の狂言——武智鉄二を媒介として——」(茂山(善竹)忠亮、第2部は【トークセッション】で「初世善竹彌五郎の芸と継承」(善竹隆平、茂山(善竹)忠亮、藤岡道子、稲田秀雄)である。

善竹彌五郎については狂言を見始めた昭和40年代の前半、東京での大学生だったところからずっと引きずっていた課題だった。昭和42年(1967)に野村万蔵が人間国宝になったのだが、それ以前に狂言の第1号の人間国宝が関西の彌五郎であったことで、どんな狂言師だったのだろうと強い興味をひかれていたのである。しかしながら没後であり、東京で話題になるということも無く(たぶんこれは私の関心の持ち方が足りなかったのだと今にして思う)、NHKの残されたわずかの映像でその舞台を知るのみだった。

今回フォーラムのために映像と音源で善竹彌五郎の芸をたどった。映像、音源は東京文化財研究所の高桑いづみ氏の協力を得た。今回入手した資料は次の通りである。(音源はCD制作・花もよ編集部)

狂言映像「木六駄」「福の神」、音源「狐塚」「宇治の晒」「地主」「井礪」「花子」「枕物狂」「業平餅」「法師ヶ母」「塗師」「節分」「靉猿」である。

(武智鉄二およびNHKの山川静夫の解説部分は省略)

この中で映像「木六駄」、音源「狐塚」「花子」「節分」を取り上げ彌五郎の芸についての感慨を述べたいと思う。

「木六駄」はNHKエンタープライズ発行『能楽名演集 狂言』に収録されていて鑑賞しやすい。フォーラム当日も放映した「木六駄」から始めたい。善竹彌五郎を実際に見ている人は少なくなっている現在だが野村万作師に取材できた。なかで印象的だったのは彌五郎の「サセイホーセイ」がすばらしかった、という話である。そのことを当日話題にすると、同じくパネリストの茂山(善竹)忠亮氏が、以前万作師に面談でその話を聞いた、サセイホーセイが雪にしみいるような声だった、とのことだった、と語られた。

彌五郎の庶民のかつ写実的な「木六駄」の太郎冠者が高い評価を得ていたことは知られている。百姓物の真骨頂の名場面、同じ境遇の牛へのいたわりに満ちた鞭使いなどは、当然、演技として当日も話題になったのだが、掛け声にまで思いが至らなかった。今回の映像を通して、繰り返されるこの牛追いの声こそ「木六駄」の凝縮された主題であり彌五郎の芸の本質を示すものだと思ふ。

れた。

彌五郎は「三井寺」の間狂言の鐘の音について、「ジャン、モンモンモン（と謡って）」もねりがなければですす目にもえない修行がいります。「ねり」が舞台にあらわれて、鐘の音も湖にわたるんでございましょう。（『能楽タイムズ』昭和36年）と語っている。ねり、という、修行の果てにつかんだ自分の声に狂言の極意を見ている。サセイホーセイを雪にしみいるような声と評した万作師の言に奇しくも通い合う。彌五郎の芸とは、と腑に落ちるところである。

「狐塚」は「狐塚 小歌入り」である。「狐塚」に、大蔵流にはない「鳴子」の謡を取り込んだもの。詞章はレコード『茂山千之丞・狂言歌謡選』（『狂言歌謡考』北川忠彦）に載る。「鳴子」の謡は諸台本で異同がある。さて、この「鳥追い」の小歌もまた百姓物の労働歌である。甘い美声と縁遠い彌五郎の声に謡われて、秋の田の面、群鳥の情景が眼前に広がる。歌詞を引用できないのが残念だが、歌詞の合間合間に「ホーイ、ホーイ」の鳥追いの声が入る。鳥を追ひ、わが身を鼓舞し覚醒させるように。この掛け声が無ければ「狐塚」はきれいいごとにとどまってしまうだろう。

最後に「花子」と「節分」である。恋情物とでもいいたいこのふたつの狂言の謡を聞いて、彌五郎のもう一つの側面を知った気がした。「花子」の鐘の音の響きである。逢瀬の夜が明け初めて鐘の音が聞こえる。そのゴーゴンゴンゴン、ゴーゴンゴンゴンの響きを地鳴りのように謡った。褥を踏み破るような地鳴りである。情事の謡は陶然として艶なるかと思えば、これはなんとというおぞましさ。男の恋とはこういうものなのか、とあらためて女の身として知らされた。そういう破壊的な彌五郎の「花子」だった。「ねり」の鐘の音だった。

その続きで聞いた「節分」だったので、この鬼の恋からも男の恋の本質を学ぶようだった。身勝手でおぞましい。現行の「節分」はこぎれいな狂言になってしまっていないか。このち、彌五郎という役者のおぞましい魅力について深い感慨とともに考え続けている

能楽を詠んだ虚子の俳句(一)

林 和利

近代の俳人として著名な高濱虚子は、能楽啓蒙家として多大な功績を

残した池内信嘉の実弟である。信嘉同様、虚子も幼少の頃から能楽に親しんでいた。

昭和十八年は松尾芭蕉の二百五十年忌の年であったが、虚子はそれを記念して新作能「奥の細道」を作っている。それほど造詣があつたといふことである。

当然のことながら、虚子の俳句には能楽を詠んだものが散見されるが、そのことを取り上げて論究したものはないらしい。

昨春来、増田正造先生からのご指示により、能楽素材の虚子の俳句を収集し始めた。『定本高濱虚子全集』（毎日新聞社、昭和四八・五〇）に収録されたすべての俳句から、網羅的に摘出した結果を一覧にしておく。

【第一巻】

能すみし面の衰へ暮の秋（大正7）

花の雨降りこめられて謡かな

昭和七年四月十二日。京都石田旅館にあり。安倍、和辻両君来り、謡二番。

春風やかけならべたる能衣裳

（明治27）

春雨や布団の上の謡本

（明治28）

具足櫃に謡本あり花の陣（明治30）

年々の見物顔や薪能（明治32）

薪能もつとも老いし脇師かな（同）

物売りの翁の髷や壬生念仏（同）

鬼の面ぬげば涼しき美男かな（明治35）

鼓あぶる夏の火桶や時鳥

五月二十五日。小庵例会。

第三回、能楽十句。（同）

松の内鼓の会のあり処（大正3）

一月十六日。小俳談。

舞台暫し空しくありぬ壬生念仏（同）

汗ばみて見苦しけれど舞ひにけり（同）

能を見て故人に逢ひし師走かな

十二月二十日。発行所例会。

（同）

喝食^{かつしき}の面打ち終へし冬至かな

十一月二十五日。鎌倉島村邸俳句会。

（大正6）

【第二巻】

雪の暮茶の時頼に句の常世

十二月十日。大正五六年頃か、鎌倉能楽堂にて「鉢木」を演ぜし時川越守男ワキを勤めくれたり。其後茶掛に句を所望せられたるに書きたる句を打ち忘れ居たるを近藤いぬゐ先頃川越の茶会に招かれ其軸を示されたるを覚え来りとして教へくれたるもの。川越は久田家の茶の宗匠なり。
(昭和12)

語り伝へ謡ひ伝へて梅若忌
(昭和13)

忌日あり碑あり梅若物語
四月十一日。大崎会。富士見町、三輪女郎。
(同)

晩涼や謡の会も番すゝみ
八月二十一日。あるじ慰問、句謡会。本田あふひ邸。
(同)

一面に月の江口の舞台かな
(同)

目のあたり月の遊女の船遊び
十月二日。武蔵野探勝会。宝生能楽堂に野口兼輔の「江口」を観る。
(同)

岡山後楽園能楽堂

鏡板に秋の出水のあとありぬ

(昭和11)

謡会すすむにつれて夕桜

(昭和18)

此頃はほほ其頃の萩の月

九月十日。九月四日信州小諸に移住。「奥の細道」第二回演能の由申来りたる桜間金太郎に寄す。
(昭和19)

狂言の魯大名初笑

一月九日。草樹会。丸之内倶楽部別室。
(昭和17)

惜みろし残菊剪りて挿む

十二月九日。七宝会。虚子古稀祝賀。草庵にて俳句会。南浦園にて謡一番。虚子シテ、近藤いぬゐワキ、「鸚鵡小町」。
(昭和18)

第三巻以降は次回につづく
*原文の旧字体漢字は新字体に改めた。

計報

朝川知勇(あさかわともお)氏が二〇一九年八月六日に逝去されました。享年八十歳。朝川直三郎基金の代表として豊橋能楽こども教室の運営に尽力され、本会記念出版『能・狂言の伝承におけるすがた』にも基金から多額の助成をいただきました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

令和元年度 例会報告(於 伝承文化研究センター)

令和元年(平成三十一年) 四月七日(日)

能《石橋》連獅子型演出の変遷

―夫婦獅子から親子獅子へ―

五月十二日(日)

東海能楽研究会年報 第二十三号 合評会

七月二十一日(日)

「伊勢門水追善狂言の会」の映像

「釣狐」について

八月二十五日(日)

越前出目家の秘事

十月六日(日)

近世の町衆が狂言台本を残すということ

―豊橋魚町における指導・地域間交流―

十二月二十二日(日)

大野出目家の伝書

世阿弥の男物狂能の場面構成

令和二年二月十六日(日)

『能・狂言における伝承のすがた』合評会

令和元年度 活動報告

令和元年九月三十日(月)

『能・狂言における伝承のすがた』(風媒社) 発行

橋場 夕佳氏

佐藤 友彦氏

鹿島 俊裕氏

保田 紹雲氏

米田 真理氏

保田 紹雲氏

三苦 佳子氏

名古屋市中区新栄二一六―二三
東海能楽研究会年報 第二十四号

二〇二〇年(令和二) 三月三十一日発行

発行者 東海能楽研究会

代表者 林 和利

伝承文化研究センター

〒460-0007 名古屋市中区新栄二一六―二三

https://sites.google.com/site/tokainohenkai/

印刷者 共生印刷株